

モンゴルと中国 庶民の素顔

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学助教授)

私は、昨年十二月下旬に日本を発ち、ソ連—モンゴル—中国と、それぞれ一週間ずつ滞在して一月中旬に帰国した。

この旅行の目的は、私共がいま進めている共同研究プロジェクトの一環としての海外学術調査であり、中ソ関係の現況を目的の当たりにしたいという希望からであった。ところがこのようなルートを通ることは一般には非常に困難なことである。果たしてこれら三カ国を同時に回る事ができるかどうか、私としても当初は不安であった。それだけに極めて貴重な旅

行であったということが出来る。

とくに中国については、私はこれまで自分の信念に基づいてのみ意見を表明してきたので、その点で中国側の反応を懸念しないうちはなかったのだが、先方は私のそうした立場を十分承知の上で今回の入国を許してくれ、しかも結果的には非常に好意的にことを運んでくれた。八年振りの北京訪問は、前回と違って単身の旅行でもあり、そういう意味からも「北京の一週間」を全く自由に堪能することができた。

「陸の孤島」モンゴルの素顔

中国に比べて厳しいのはむしろモンゴルである。モンゴルは日本と国交を樹立し、昨年から日本大使館も開設され、大使以下数名のスタッフが常駐しているが、新聞記者も商社員もいないので、文字通り「陸の孤島」にも等しく、それだけに入国も厳しい。入国以上に厳しいのが出国であって、とくに今回の私の場合のように、モンゴルから中国へという方が非常に厳しいといえる。つまり、現在の中蒙関係からするとモンゴルから中国へ行くことは、一種の「裏切り者」といった雰囲気になる訳で、それほどまでに中蒙の関係は悪い。

一般にモンゴルといえば「草原と包」^{ポウ}、「草原の革命」とか、とかく日本人のロマンチズムを満足させる対象になりやす

い。かつては檀一雄の「夕日と拳銃」といった世界、山中峯太郎描く「アジアの曙」といったイメージを抱く訳だが、実際のモンゴルはイデオロギー的にも生活の上でも非常に厳しいものがある。ウランバートルの町の周りなどは包の大変な密集地で、しかもスラム化しており、日曜日の青空市場などはモンゴル人の生活をそのまま反映しているのだが、われわれの尺度から見れば、これまた大変後進的な状況にある。靴の片一方とか、古いライターといったものが板の上に数点のっているだけの露店が沢山並び、そこに黒山のように人がたかっている。

デパートや八百屋や肉屋には物が少ないし、ホテルには確かに羊の肉の匂いがむんむんしているが、その肉たるや固くて石を噛むような代物で、それですら一般の民衆が手に入れることはむずかしい。ミルクとかヨーグルト類も一般民衆には非常に少ない。

そこには素顔のモンゴルが映し出されているのだが、この青空市場や包の密集地は写真にとることができない。おそらくモンゴルという国は、長い間、中ソの狭間に存在していたという宿命の中で苦しんできたために、一種の「小国の大國主義」といった態度で旅行者にたいして厳しいチェックをするのだろう。

今日のモンゴルは、イデオロギー的には完全にソ連の影響下にある。よくモン

ゴルは、ソ連の十六番目の共和国だといわれるが、中央アジアのウズベク共和国あたりと比較してみても、ソ連の影響力はむしろモンゴルにおいて過酷だといってもいいような気がする。

モンゴル革命についてのソ連の公式見解は、「コミンテルンと共鳴して」となっているが、決してそんなものではない。にもかかわらず今日では、レーニンやコミンテルンがいかにモンゴルを助けてくれたかといって讃えられている。確かにモンゴルは、清朝の統治に対して反漢・反清闘争を経て独立を達したといえる。そして、その中核となった人民革命党という小さな組織は、より団結して統一していいはずであるが、実際は、この党は当初から常に激しい権力闘争を繰り返しているのである。小さな政党であるが故に、よけいに中ソ関係がもろに影響し、常に肅清の歴史を繰り返さざるを得なかったのである。

例えば、十年ほど前に「成吉思汗の生誕八百周年記念」をめぐって、「成吉思汗の生誕を祝うのは民族主義者だ」として多くの指導者が政治局などから追放されてしまった。また、モンゴル民族の精神的バック・ボーンになっていた雄大な叙事詩の古典—「元朝秘史」についても、ただ単に、当時の「階級社会を分析するための資料」として考えている、というだけの無味乾燥な見方を公式的にはして

いる。それほど、今日のモンゴルはイデオロギー的にも主体性を失っているのである。科学アカデミーの正面に今日でもスターリン像がそびえていることも、このことを証明していよう。

こうした現実のモンゴルと、一方、ロマンチズムの対象となるモンゴルは、国としては小さいが中ソ関係を考える上で非常に大きな意味を持っている。まさにああいう流動的な緩衝地帯が、中ソの中間地帯として存在してきたことが今日の宿命的な中ソの歴史的ダイナミックスを形成している訳である。ところが意外とこの点についてのわれわれの認識は不足しているのではないか。

冷え切っている「モンゴルと中国」

モンゴル人の対ロシア感情は決していいものではないが、それ以上に悪いのが対中関係だといえる。一九六四年には対蒙中国援助は途中で打ち切れ、技術者を全部引き揚げてしまったことをモンゴルは強く非難しているし、「毛沢東は常にモンゴルを中国に併合しよう」としているといった見方、さらに歴史的には清朝のむごたらしいモンゴル統治などを挙げて反中教育を盛んにやっている。

最近、対中関係でとくにクローズ・アップされた問題は林彪事件である。

私もこの問題には興味があり、今回のモンゴル行によって何らかの形で林彪事

件の輪郭がより明白になるのではないかといい期待があった。できる限りの情報を集めた結果は私の予想していた通りであった。つまり、林彪はモンゴル領に墜ちてはいないとモンゴル側はいう。確かに飛行機は墜ちたがそこに林彪は乗ってはいなかった。林彪がモンゴルで墜落死したというのは中国の宣伝であって、実際には北京で殺されたのではないかと、こういう見方をモンゴル側はしている。

中国はモンゴルに墜落死の遺体の引き渡しを要求したが、これに対してモンゴル側は中国に「搭乗者の名前を知らせて欲しい」と申し込んだところ、中国側はそれ以来、その要求を引つ返めてしまったという。林彪事件は依然として多くの謎を残しているが、肝心の点についてこれほど評価の違う事件もめずらしい。

こうしたモンゴルを後にして中国に向かった訳だが、冒頭に申し上げた通り、その出国は極めて厳しく、汽車のお客は私とブルガリアの大使館員の二人きりで、外交官は外交パスポートでフリーだから、私一人が対象となり、汽車の二時間の遅れは私一人のチェックのためだった訳である。入念なファイルムの捜査や、日本の一万円札のスカシを「これは何か」などという現金のチェックやらで一時間と……。中国大使館で取得したビザを見せると、中国のビザなどわれわれには一切無関係だ、それよりお前は何のために

中国へ行くのか、という尋問を繰り返すことで一時間……。とにかく私を中国へ行かせたくない様子である。そこで私は最後に日蒙友好の必要性を諄々と説き、ようやく、今回は日蒙友好のために特別にお前を出国させてやる、ということになった次第である。

「脱政治と断絶」の中国の顔

こうしてゴビの砂漠を汽車で越え、三日間を費しての中国入りだったから、中国は別世界のように感じられた。中国に着くと駅長自らが貴賓室に案内してくれたり、国境警備のお巡りさんもとても親切である。驚いたのは、国境地帯は意外と平静で、生産建設兵団や人民解放軍の姿は一切見かけなかった。モンゴルでは、ソ連の恒常的な軍事基地体制がしかれていて、至るところに兵隊がおり、砂漠の中を軍用車が通り、飛行機が旋回したりといった状態である。

中国自身は、中ソ対立について、従来の対ソ対峙戦略的なものから、「東に声をあげて西を討つ」ソ連として、よりグローバルな世界政策のなかで考えていこうとする姿勢がみえる。従って二、三

年前のような直接的な戦争の脅威を中国側は感じていないようであり、そのような緊迫感も感じられなかった。

こうして私は二連から中国へ入壇し、集寧―大同―張家口を経て八年ぶりに北京に入った。八年前の文化大革命当時に比べれば、北京は非常に落ち着いている。服務員の態度なども、かつての「わざとらしい親切さ」はなくなっていて、われわれが見ているようといまいと暇があればトランプに興じている。また、どこを見ても毛沢東語録を読んでいる様子などまったくなく、「批林批孔」運動を学習している光景にも一度も出合わなかった。そうした中国の変化は汽車の沿線からも感じられた。第一、スローガン―毛沢東万歳、中国共産党万歳がめっきり少なくなり、明らかに塗り消されたあとさえみえる。「東方紅」であるとか「大海航行



万寿山の前に立つ筆者

「靠舵手」とかいった毛沢東讃歌もほとんど耳にしない。

北京の市内の雰囲気は、明らかに脱政治で、かつての紅衛兵はいまやたんなる模範生であり、いわばボーイスカウト、ガールスカウトのようなものになっている。街の目抜き通りは確かに美観があり、市場の商品も豊富で、自転車なども新しいものが増えている。北京の近郊農村には至るところで耕耘機が動いている。着ている人民服もござっぱりしてきれいなものになっている。それと同時に、八年前には見かけなかった手鼻をかむ人、痰をはく人が減法多くなっている。自動車の増加とともに、香港の街角のように交通道徳が乱れ、交通事故も増加している。つまり北京の表情は、すべてに平常化し、同時に「政治第一」、「政治突出」という雰囲気はまったくなくなっているという印象を受けた。

しかし、同時に北京にはもう一つの表情がある。まず街の表情にしても表と裏があるわけで、その裏街表情と表との断絶は極端であり、発展の遅れは相当のものである。

私は今回、その裏街にも何回か足を踏み入れた。例えば、北京駅は大変立派だが、その駅前の朝陽門南小街とか、前門外の小路だとかは、いかにも古く、きたなく、共同便所の匂いありで、強いショックを受けた。

招待で訪中するおえらいさんが、北京飯店に泊り人民大会堂で要人と会い、万里の長城、明の十三陵、一、二の人民公社等を回るといっておきまりのコースをたどって、そこだけからみれば、確かに中国は労働文明社会というようなことになるのかもしれないが、むしろ素顔の中国は、中国自身がいつているように、まだ完全な発展途上国なのである。

こうした断絶は、何も街の様子だけではなく、例えば、人民大会堂で今回も繰り広げられたあの政治的なドラマの世界と、一般大衆レベルの世界とのあいだにも横たわっている。

スコラ的になった「批林批孔」運動

一月十三日から十七日までの五日間、人民大会堂で開かれた第四期全国人民代表大会（全人代）は、事後知らされた。

ところで、一般市民にとっては、全人代といっても全然別の世界のことである。憲法が制定されたからといってそれを信じて読む民衆が一体何人いるかというのを考えると、日本の新聞は相変わらず大騒ぎしたが、中国において憲法とは毛沢東もいつているように「根本的大法」なのであり、むしろ一種の政治的な宣言にしか過ぎないのである。第一、「人民日報」などを読む人も三百人に一人ぐらいのだから、「批林批孔」運動といってもその「人民日報」や「紅旗」

だけを見ているとなにか中国全民衆のものであるかのような錯覚に陥るが、そんな雰囲気は全くない。最近ではこの「批林批孔」運動の論調がきわめてスコラ的な瑣末主義になり、当初の性格を大きく変質させてきていることも事実である。

もう一つ現象面からいうと、例えば、北京では今日でも博物館類は一切立ち入り禁止である。革命博物館、歴史博物館、軍事博物館、中国美術館、北京図書館など……。さらに北海公園、景山公園、なども立入り禁止であり、北海にかかる橋には全部鉄柵がしてあり、番兵が三十米おきに立っている。これらのところから毛沢東らが住んでいる中南海が見え、あるいはそこに隣接しているからにほかならない。こうした現象面を東京にたとえれば、皇居が中南海とすると丸の内ビル街、日比谷公園といったあたりが全域にわたって立ち入り禁止で鉄柵がめぐらされ番兵が立っているというふうに見える。考えてよい訳である。もし東京がそうであるとすれば、たちまち世界の大ニュースとなることは間違いない。ところが中国となると、肝心のことが何一つ日本に伝わってこないという現実がここにもあるのである。

こうした中国社会の断絶、二つの顔、素顔といった辺を十分に弁えた上で中国のことを考えると、今回の全人代がもついろいろな問題が自から判明してくるの

ではないだろうか。

臨場感のない北京報道

私は北京滞在中、幾つかの状況証拠によって全人代の開催が迫っていることが分かっていった。

まず第一に、モンゴルから汽車で国境を越える時は、一等寝台車が一两しかなかったのが、それが北京に着いた時は二両になっており、それには地方幹部らしい人が沢山乗っていて、北京駅頭に降り立った。そして北京では日本大使館を通じて、香港代表が既に来ているらしいということも耳にした。さらに民族飯店の日本商社員の引越し、友誼賓館への地方代表の入館——これは私の教え子や友人たち日本人常駐者の話から分かったことである。人民大会堂の周りの番兵の増加。さらに外国人はほとんど行かない旧鼓楼大街には、「第四期全人代の開催を運えよう」というステッカーが糊あとも生々しく貼ってあった。こうしてみるとやはりそこには何かあるぞ、と考えるを得なくなる。ところで北京特派員の方々には私の友人も多く、今回もいろいろお世話になっただけに、一寸申しあげにくいのだが、私が鼓楼一带を歩いてきて、右のようなステッカーを見つけたと話すと、ある日本人特派員から「鼓楼ってどこにあるのですか」と質問されたのは驚いた。

海外文化短信

新聞と放送の経営切離し

日本では民放キー局と全国新聞との系列化が急速に進んでいるが、何事につけ、独占禁止、集中排除の原則を重んじる米國では、日本と正反對の動きが目立っている。

FCC（米連邦通信局）がこのほど下した裁定によると、今後は同一地域で新聞と放送局が新たに同一資本で経営されることは禁止となった。しかしこの裁定は、十六都市を除いて、現存する新聞、放送の複數経営を承認しており、一九七〇年提案より、はるかに穏やかな妥協策である。もしこの提案が採択されればニューヨーク、シカゴ、サンフランシスコほか二十都市の複數経営者は、しめて時価二十億ドルの放送局資産を売り渡さねばならないところだった。

もつとも北京特派員のあり方がいろいろと批判されがちだが、確かに気の毒な点もある。例えば、全人代についてもこれまで何回となく報道しては裏切られているので、またかといった感じがある。それに一般に取材は困難なのだから、自分の足で情報をとることをだんだんしなくなり、また歩いても情報とれないという実情もある。

従って、特派員も、自然と日本人同士の付き合いに限られてくる。それに若い特派員でも立派な家に住み、お手伝、コック、運転手、助手などを雇っていて、何があんでも自分で情報を得るんだという努力をしなくてもよいようになっていく。とにかく労働力が豊富で安く、平均

賃金は月六、七十元であるが、日本人はその倍額近くの百二十元から百五十元、つまり二万円前後も払って雇ってくれるのだから、先方も喜んでその雇用斡旋を全部外交部がしてくれるわけだ。

こうした状況下にある北京特派員は、モスクワ特派員に比べてみても、どうしてもギリギリの切迫感、臨場感に欠けることになる。モスクワの場合はおおむね反体制的な視點に立つ記者が多く、常に現体制に対して「突っ込んで見てやろう」という精神が漲っているが、北京の場合は、「中国の偉大さ」に心服している記者が多いので日本の読者の疑問を代表して問題点をうかがってゆこうとはしないのであろう。その辺のところがある意

七〇年提案は、マスコミ資本を多角化する事によって、読者や視聴者がバラエティに富んだ新聞記事、放送番組に接触できることをねらったものだが、マスコミ経営者側は①多角化は机上の空論で実際上は不必要②経済的に採算がとれない——などの理由をあげて強硬に反対していた。

今度の裁定は、こうした反対も考慮に入れたあと、たとえ同一地域に新聞と放送の複數経営者が存在しても、これと競争する別の新聞社または放送局があれば、資本分散化を図る必要はない、との基本線を設定したものだ。ただ十六の大都市については、それぞれただ一つの新聞と放送局が同一資本の手中にあり、住民はそれ以外の情報源を全く持たないため、FCCは各経営者が一九八〇年一月一日までに、新聞が放送局のいずれかを手放して、他の資本に運営をゆだねるよう指令したわけ。

味では、日本でいわれる中国報道の問題点となって出てくるのではなからうか。

「名」をとった文革派、 「実」をとった実務派

第四期全国人民代表大会は、結論的にいうと、毛沢東以後への移行期にふさわしい暫定的な体制が確立されたとみることができよう。もちろん新憲法を見る限り、文革路線が散見でき、そういう意味では文革派が「名」をとっている。しかも毛沢東を頂点とする党の一元的指導という形式的縦割り制度によって、国家機関が党の中の一行政機関となってしまった。しかし、こうした縦座標に対して、意外にも実際の人事においては、明らかに復権した幹部たちが大きな壁をつくっている。つまり、そこに実務派官僚の大きな壁がある。

高齢化、周恩來の病氣といったところから出てくる將來への不安がもたらす暗黙の合意である。もう一つは、「開かれた中国」への外圧がひたひたと押し寄せているという点も見逃せない。もともと現在の体制は、こうした一種の妥協の産物であって、経済建設のウエートがいかに大きいかというところからくる実務派体制である。従って「実」は実務派グループのものとなったといえよう。

しかし、ジェロントクラシー（老人支配体制）の問題も未解決であり、建て前上、毛沢東にすべての権力が集中してしまっただけに毛以後の問題が依然として大きな問題として残った。

とはいっても、今回の体制が、一部でいわれているように毛沢東の権威の大幅な失墜を意味するものとは思われない。毛語録は読まれなくなり、毛の老齡化は拭えないとしても、中国人自身が毛の権威の驕りを感じていない。つまり、毛の老齡化にもかかわらず、あのカリスマ的権威は依然として維持されているのである。そうした点を十分承知の上で非毛沢東への道を徐々に進めているのである。少なくとも周恩來はそういうふうにか考えているかもしれないというふうにか考えておくほうがいいのではないか。

にもかかわらず、昨秋以来、「批林批孔」運動は實質的に変質した。この運動はもともと路線闘争であり、政治権力闘争的な色彩をもって発足したものであったが、それが変質し終熄しつつある原因は、そこに一つの凝集力が働いたのである。その凝集力は何と云っても毛沢東の

とにかく現在の中国には、二つの断絶した世界があるが、全般的には文革的、政治第一的な雰囲気は去り、経済建設が中心になりつつあるといえよう。

こうした中国の新体制の反映もあって、これからの日中関係は、日ソ関係の絡み合いもあり、益々重要な問題を提起してくるものと思われる。（講演記録）

新聞

商品としての新聞は、従業員一人あたり何部ぐらい生産されているかとみると、中央紙では読売九二、朝日七五四、毎日七〇一、日経四九七、サンケイ四四七である。読売は三本社が別会社で、これは東京の数字だが、むりに三本社を合算してみると八六四となる。プロック紙は中日三三、道新四二二、西日本二四二で、他の県紙は多いところ五百余、少ないところで四百そこだが、その中で静岡一一七、山梨八九五がダンゼン群を抜いているのが目立つ。

各社間の大きな開きは必ずしも経営の安定度を左右するものではないらしい。販売収入を上回る広告収入や営業外収入、経営規模による支出の開き、などを加算する必要があるからだ。各社の決算報告がそれを証明している。一人あたり生産部数は一つのメドに過ぎぬ。(公)

出版

出版科学研究所の調査によると、昨年度の週刊誌発行部数は十一億四千七百七部で前年比〇・三%の微増にとどまったが、その中で総合誌は、新聞社系七点が一億二千四百六十六万部で四・五%減、出版社系八点が一億七千五百三十三万部で七・三%減と、いずれも四十四年をピークに落ち込みをつづけている。ここからあたり、週刊誌ブームは終わっている。とさきやかりの因があるが、毎週きまって五百五十万の読者を持つ勢いはあなどれない。

一方、日販連報のベストセラーをみると、小説では「収容所列島」がいまトップにあるが、その他目につくのは、昨年夏ごろの「勝海舟」秋ごろの「華麗なる一族」そして現在の「元禄太平記」などである。いずれもテレビの大河ドラマでおなじみのもの。ベストセラーはマスコミによって作られるということになる。(J)



電波

NHKの元老アナ・野村泰治さんが四月からTBSのショー番組に出る。タレント議員の富田輝さんもNETにカムバック、新番組「日本縦断」で「ふるさと」の歌祭り」に対抗する。「ニュースセンター9時」の磯村尚徳さんにも呼びがかかっているという。

これは今にはじまったことではない。高橋圭三、八木治郎、小川宏さんらの例もあるが、どうして民放はこうもNHKの完成品に片思いするの。発足して四半世紀、そろそろ自立できないものか。アナばかりでなく、番組までそっくりいたたこうというのだから驚く。もっとも発足そのものがNHKの未完成品に頼ったのだし、NHKにしてもアナの先輩は松内則三、河西三省、宝田通元、山本輝さんなど、新聞記者から迎えたのだ。マスコミ企業は先輩に学べ、ということか。(Y)

電通の調査による昨年度の広告量は前年度に比べ、新聞九・四%、雑誌五・〇%、テレビ〇・一%、ラジオ〇・二%と、いずれも減少している。マスコミ四媒体がそろって低迷したのは実に十年ぶり、特に印刷媒体の不況が目立つ。

この傾向は新年になっても改まらない。中央三社の一月度の広告段数は、朝日六三三二、読売五五四六、毎日四九九〇と、昨年のオイル・ショック直後の落ち込みをさらに上回って、一挙に五年前に逆戻りした。

このような段階は、たとえ料金値上げをして、売上げ高にひびくのは当然で、朝日社報は「広告収入は一月に予算に比べ七億五千六百万円の減収、三月までの累計赤字は十五億二千八百万円に及ぶ」と深刻に受け止めている。朝日にしてこれだから、(猛)

広告

入会購読のおすすすめ

本誌顧問

愛川重義・荒垣秀雄・有竹修二
稲葉秀三・今村武雄・加瀬俊一
高田元三郎・千葉雄次郎

◇本誌購入は、直接お申込みくださる固定読者をもって会員とさせていただきます。年会費3,000円を振替または銀行振込み、その他ご便宜の方法でお払込み下さい。

◇なお全国の有名書店でも販売いたしておりますので、お求め下さい。

編集後記

◇政治が行き詰まると誰しもが居住いを正して、対話と協調を口にし、D・ローズヴェルトの「炉辺談話」を語る。高邁な哲学や安易な大衆迎合や卑見も必要としない現実直視から出てくる巧まざる姿勢——対話と協調の基調はここにある。ハニュー・デイルにはこれといった哲学はないVとはローズヴェルトの有名な言葉である。

◇三木政権は「不人気なこともいう」として発足した。「不人気」を憚るのは別に政治家だけの人情ではない。対話と協調の国民的人気商売といえなくもない。そこで「不人気」を共有しながら「対話と協調」の国民的なコミュニケーションをどのようにしたら確立できるのか。座談会の企画意図はそこにあつた。さらにその補足として、政党の広報活動を各党提出のレポートを中心に纏めた。

◇広報活動の最も巧みな政党は日共だ。しかし、レポート依頼で示した同党の「慇懃」と「冷さ」には少なからずとまどった。同党のもつ一種の閉鎖性は、逆にそれだけ党広報を必要としているのかもしれない。ここにも対話と協調の限界がある。

◇「中国報道の屈辱的な偏向」(三月号 三好修氏)に陥っている日本のマスコミにあつて、中嶋嶺雄氏の中国報告は、偏向・修正の一助となるものだが、訝しい報道はあとを断たない。韓国で釈放された日本人二被告と美濃部都知事不出馬の扱いはどう見ても常軌を逸している。バランスを欠いた報道もたらす虚しさと言ひしがそこにあつた。

◇「週刊誌」興亡の半世紀は前号を以ってひとまず終わった。というのは週刊誌時代といわれる四十年代が手つかずのままであるからだ。それにしても大衆好評を得た読物で、片岡氏の一年余に亘る苦勞を多とする次第。

◇「硬い雑誌」という大方の批評のもとに本誌も五年目。今後軟かさも加えたい。

マスコミ文化		4月号 通巻(40号)	定価250円
昭和50年4月1日発行		昭和48年2月2日第三種郵便物認可	(送料20円)
編集発行所	マスコミ文化懇談会	105 東京都港区芝虎ノ門8 興業会館	振替口座 取引銀行
編集発行所	下野信恭 社団法人 国民出版協会	電話 501-8038 (代表)	東京191395 和銀行(普) 三銀行(当) 三銀行(当) 各虎ノ門支店
印刷	株式会社 文唱堂		